
魔法の国のティカ

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の国のティカ

【Nコード】

N2177BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

佐藤千花（16）はどこにでもいる普通の女子高生……のはずが、ある日突然、自転車ごと魔法大国ガルディアに異世界召喚される。たまたま膨大な魔力を宿していた振り回され体質の主人公が魔術師の弟子になって、なぜか城でお姫様生活をしたり、自転車で異世界観光したり、ツンデレ師匠の束縛紛いの監視の下、王子や騎士達に囲まれてうるたえたりする、ちょっと非日常な異世界生活を綴ったファンタジー・ラブコメディ。

00 わたしのハゲ抹茶

「あー、アイス食べたい。アイスアイスアイス」

残暑厳しい夏休み。

佐藤千花は無性に高級アイスが食べたくなって連呼した。

今外に出たら暑いだろうなー。あー、でもアイス食べたい。

少しばかり迷った後、結局千花は近くのコンビニまでアイスを買
いに行くことにした。

「千花ー、どこ行くのー？」

二階の部屋から階段を降りていくと、リビングにいる母親から声
をかけられた。

「ちょっとコンビニにアイス買いに行ってくる」

「それなら、ついでにいちごのかき氷買ってきてよ」

「うん、分かった。行ってくるね」

千花は頷くと玄関を出る。

「……あつつ……蝉うるさー……」

文句を言いつつ、軒下に置いてある自転車を取りに行く。

照りつける太陽の下、自転車を漕いで三分ほどのコンビニに着く
と、千花は目指す高級アイスとかき氷を手に入れた。

自転車のかごにコンビニのビニール袋を放り込むと、千花はアイ
スが溶けてはかなわないと速攻で自転車を走らせる。
すると、目の前にきらきら光るものが見えてきた。

やだ、ガラス？ 避けないとパンクしちゃう。

千花はその場所を避けようとハンドルを斜めに向けようとしたが、
なぜかそれが出来ずに自転車は直進する。

「ええ？」

今度はブレーキを思い切り握った。……がそれも効かずに自転車は更に加速した。

「うええ！？」

思わず千花の口から素っ頓狂な声が漏れる。

なにこれ、チャリ壊れた！？

自転車はきらきら光るものに当たるといきなり停止した。

「おおっ！？」

放り出されるかと思って、千花は女子にあるまじき声を上げる。しかしその衝撃はなく、真下にあるきらきら光るものがいきなり円を描いた。

次の瞬間には光の洪水が来て、千花は思わず叫んだ。

「な、な、なにこれーっ！？」

光の洪水が治まると、千花はまったく見知らぬ場所にいた。——それも、どう見ても室内。

千花が呆然としてみると、目の前の淡い金髪で水色の瞳の男は自転車のかごからコンビ二袋を取り出した。

——緩く波打つ背中の中程まで長髪。顔は超絶美形と言っていると思う。千花が今までお目にかかったことがないような美形だ。けれど、この衣装はなんだろう。まるでファンタジー映画に出てくる人のようだ。

千花がぼーっと見とれていると、超絶美形はおもむろにアイスを食べ始めた。そこでやっと千花ははっと気づく。慌てて自転車のスタンドを立てると男に向かって叫んだ。

「ちよっ、わたしのハゲ抹茶！勝手に食べないでよ！」

「禿マツチヨ？ おかしな名前だな。もう一つあるだろう、それを食べろ」

「なんであなたに指図されなきゃいけないのよ、禿ドロボー！」

楽しみにしていたアイスを奪われ、更に上からの男の物言いに千花は頭に血が上る。

「おまえは目がおかしいのか？ 俺は禿げてない。……ああ、頭がおかしいのか気の毒にな」

「なんですってえええっ」

あまりの言われように、千花は思わずきいっと叫びたくなる。

「いらないのならそちらも俺が貰うが」

「！ 食べる、食べるわよっ」

千花は慌てて男からコンビ二袋を奪い返した。そして溶けかかったいちごのかき氷をかきこむ。

「う」

頭にきーんと衝撃が来て、千花は思わず呻く。

「やはり馬鹿だな」

心底馬鹿にしたような男の表情に千花はむかむかした。

「うるさいよ！」

一声叫ぶと千花は目の前のかき氷にとりあえず集中することにした。

かくして、室内には不似合いなママチャリを挟んで、見た目ファントジーな男と千花がアイスとかき氷を食べているというおかしな構図が出来上がったのである。

01 どうやら異世界らしい

千花がかき氷を食べていると、四十代ほどの男性が室内に現れた。なにか突然出てきたような気がするのだが、千花の気のせいだろうか。

『カイル、召喚魔法をやたらと使うと言ったはずだが。またおまえは使ったのか』

千花のアイスを奪った男に文句を言っているようだが、なんとなくべつていいのか千花には理解できない。

「……誰？」

短い茶髪に青い瞳。また外人だ。この人もファンタジー映画のような格好をしている。

いや、それ以前にここはどこなんだ。悠長にかき氷なんぞ食べている場合じゃなかった。

千花の疑問には二人は答えず、勝手に会話が続いていく。

「……師匠は弟子を取れと言った。だから、召喚魔法で魔力の強い者を喚び出した」

「はあ？ 召喚魔法ってなによ？ ファンタジー小説とかゲームじゃあるまいし」

いくら目の前の男の格好がファンタジーでも、言ってることまでそんなことってある？ ……もしかして危ない人？

そんなことを考えて、千花が目の前の男から更に距離を取る。

『……なにを言ってるのか分らん。ひょっとして異世界の者が？』

「そうだ。ここより科学が発達している世界の者だ」

千花の質問を無視して目の前の男と壮年の男の会話が進む。

『……おまえ、なんてことをしてくれたんだ。異世界の者を召喚した。今すぐ帰すんだ』

「そついうわけにはいかない。この娘には、俺の弟子になってもら

わなければ」

「弟子ってなによ？　なんでわたしがあんたの弟子にならなきゃいけないの？」

弟子って、なにかの伝統芸かなにかだろうか？

なににせよ、アイスを奪われた恨みは深い。こんな男の弟子なんて、千花にはまっぴらごめんだった。

「後で説明する。おまえは少し黙ってろ」

「なっ」

そっけなく男に一蹴されて、千花は気色ばむ。

『この娘にも家族や友人はいるだろう。それをこちらの勝手な事情で引き離す訳にはいかないだろう』

「しかし、たぐいまれな魔力の持ち主であることには変わりはない。もう決めたんだ。俺はこの娘を弟子にするぞ」

「魔力ってなによ？　勝手に人を弟子に認定しないでよ」

「黙れ」

男が千花に手のひらを向けると、なぜか彼女は話せなくなった。

な、な、なによこれーっ！？

千花は驚愕に口をパクパクさせる。

『……仕方ないな。おまえが言い出したらどんなに反対しても無駄だとは分かっている。だが、こんな大きな娘を弟子にするのはいろいろ問題があるぞ』

「とりあえず、この娘の部屋は用意する。それでいいだろう？」

『分かった、それでいい。……ああ、その娘の難民登録をするのを忘れるな』

「ああ、分かった」

よく分からないが話は付いたようだ。

それならわたしにも分かるように話して欲しいものだ。そう思っ
て、千花は二人をじつと見る。

『言語疎通の指輪を渡した方が良さそうだな』

壮年の男が腕を掲げると、その手のひらに指輪が出現する。

なっ、なにあれ？　なにかの手品？

壮年の男が千花に近寄って左手を取ろうとしたので、慌てて彼女は後ろに後ずさった。

しかし、男がなにかを呟いたとたん、体が動かなくなっただけで千花は焦る。

な、な、なんだこれー！？

男は動けない千花の手を取ると、左手の中指に指輪をはめた。

「これで我々の言葉が分かるだろう。……カイル、この少女の沈黙魔法を解け」

あれっ？　話が分かる！

千花が驚いていると、カイルと呼ばれた青年が彼女に向かって短くなにかを呟く。

「……ちよつと、ここはどこなのよーっ！？」

話せるようになったとたん、カイルに千花は叫んだ。

「……もう少し、黙らせておいた方がよかったか？」

「そう言うわけにもいかないだろう。少なくとも我々には説明責任がある」

うんざりした口調のカイルに壮年の男がカイルの肩に腕を乗せて苦笑する。

「……ここは、オルデリード大陸、ガルディア王国。首都のルディアだ」

「は？　聞いたことない名前なんだけど」

「それはそうだろうな。おまえからしたらここは異世界だ」

いせかい。異世界。異世界！？

「あはははは、冗談きつついわ」

千花は笑い飛ばしたが、目の前の二人はいたって真面目な表情だ。……すぐには信じられないのも仕方ないだろうな」

壮年の男がなにごとかを呟くと、景色が一変した。煉瓦色の屋根が遙か下に見える。

「ちよ、うそっ！　足、体浮いてるっ」

「ここが中央ルディア市内だ。……おまえ、うるさいぞ」

カイルが眉を顰めるが、地に足が着いていない状態というのは不安なものだ。

「し、仕方ないでしょ。この状態で静かに出来るかつての！」

「まあ、そうかもしれないな。だが、落ちないから大丈夫だ」

壮年の男が苦笑すると、一点を指さした。

そこには立派な白い城。その城を中心としてヨーロッパのような古い町並みが円を描くように取り囲んでいた。

「なにあれ、もしかしてお城？　ここはヨーロッパかなにか？」

「もしかしくなくても城だが、おまえの言うようなヨーロッパというところではない」

カイルが千花の疑問を軽く否定する。

「それじゃ、新しいテーマパークかなにか出来たの？」

それにしてもすごい規模だ。日本一大きいと思われる某テーマパークを軽く上回る。

「あれはガルディア城だ。この国の中心。魔法大国の顔でもある」

壮年の男が真面目に説明してくれるが、どうしても違和感が残る。

「さつきから魔法、魔法って……、おかしいんじゃないの、あなた達」

「じゃあ、今浮いているのはなんだ？　さつき室内から移動してきたのは？」

「えー……、手品？」

千花が苦し紛れにそう言うのと二人は頭を抱えた。

「ここまで見せて理解できないとはおまえは馬鹿か？」

カイルが心底呆れたように言った。

「なっ、失礼なこと言わないでよね！」

「待て、二人ともとりあえず戻るとしようか。これでは埒があかない」

「……ああ、そうする」

カイルが手を振ると、さつきの場所に戻ってきた。

「あ、あれ？」

「これが移動魔法だ。いい加減理解しろ」

千花が首を傾げているとカイルが冷たく言い放つ。

「この娘の場合、理解したくないというのが正解のようだがな」

「……ならば、理解させてやるまでだ。おいおまえ、名はなんという」

偉そうに言われて、千花は力チンとくる。

「人に名を尋ねるのなら、まず自分から名乗ったらどうよ？」

「……なんだと。——まあ、いい。俺はカイル。カイル・イノーセン。魔術師だ。こちらにいるのは俺の師匠でシモン・ガーランドだ。魔術師？ やっぱり鳩とか出すあれじゃないの？」

「わたしは千花。佐藤千花だよ。そちら風に言えば、千花・佐藤かな」

「ティカ・サトー？」

「ティカじゃなくて、千花！ ちゃんと発音してよね」

「……悪いが君の名前は、この大陸の人間には発音しにくい。良ければティカと呼ばせてもらっていいかな？」

カイルに比べれば大分人当たりのいいシモンに言われて、千花は不承不承頷く。

なにか納得できないが、発音できないのならば仕方ない。

「まあ、それならしょうがないけど」

「弟子のくせに偉そうだな、ティカ」

「あんたに言われたくないし！ 第一弟子ってなんのことよ」

「おまえには俺の話は聞こえていたと思ったが。おまえの頭はスポンジか？」

「……そこまであんたに言われる筋合いはないんだけど？」

ビキビキと千花の周囲の空気が凍る中、シモンが慌てて言い繕った。

「カイル、おまえは口が悪すぎるぞ。ティカ、この男は言葉は悪いが腕だけは超一流だ。弟子としてそれだけは安心していい」

「とりあえず、おまえが俺の弟子になることはもう決定事項だ。おまえは家に自力では帰れないしな」

「……なんですって？」

到底看過できないことを言われて、千花は挑戦的にカイルを見上げた。

「召喚魔法でおまえをかの世界から喚び寄せた。どうしても帰りたいたら召喚魔法を習得してから帰れ。俺ですら習得に何年もかかった高等魔法だな」

「ちよつと、勝手なこと言わないでよ！ わたしはあんたの弟子になるなんて一言も言っていないわよ！ わたしは的意思是どつなつちやうわけ！？」

「はつきり言えない」

きつぱりとカイルが言うつと、シモンが肩を竦めた。

「……こんな男だから、この際、諦めてくれ」

「第一、師匠が城に仕官できなければ弟子を取れと言わなければこんな面倒なことせずにすんだんだ」

「俺のせいかな？ まさか召喚魔法で弟子を喚びだすなんて普通思わんだろう」

シモンが少し情けない顔になる。

千花は今までの二人の話を思い返しつつ、なんとか話を理解しようと努めた。

「……えーと、話をまとめると、ここは異世界でカイルがわたしを召喚魔法とやらで喚びだしたわけね？ それで、その理由は弟子を取るからだつたと」

「ああ、そうだ」

千花の確認に、カイルがあつさりと頷く。

「それで、わたしが召喚魔法を習得しないことには家には帰れないってことよね？」

「そついうことになるな。まあ、諦めろ」

——諦めろと言われて、そう簡単に諦められるかつての！

「そうなんだー。ふふふ」

千花はやたらとふふふと笑うと、不気味がるカイルにおもむろに近寄る。そして彼に往復ビンタを思い切りお見舞いした。

02 結局、異世界生活

「……なにをする!」

カイルは打たれた頬を押さえて一瞬呆気にとられた後、千花に怒鳴った。

「それはこっちの台詞よ。あんたのやったことは犯罪じゃないの。誘拐よ、誘拐」

千花が腰に手を当てて声を大にして主張する。

「まあ、そういうことになるな」

シモンが鷹揚に頷く。

「あんたを警察……があるかは知らないけど、警備の人に突き出してやるんだから!」

「出来るものならやってみろ。言っておくが俺は城に顔が利くぞ。多少のことなら揉み消せる。それに、どこから見ても異国の者のたわごとを信じる人間がどこにいるんだ」

——この悪党!

ギリギリと歯ぎしりしたい思いで、千花はカイルを睨みつける。

「そんなことより、素直に俺の弟子になれば生活の保障はされるし、いつかは帰れるぞ」

「生活の保障なんて当たり前でしょ! そっちが喚びだしたんだから!」

「弟子にならない場合はおまえの生活の保障は一切ないからそのつもりでいろ」

「ちよつと!」

ふざけんな! どれだけ自分勝手なんだ。

憤った千花はカイルよりも立場的に偉いはずのシモンに助けを求める。

「じゃあ、シモンさんどうかしてください!」

「すまない、それはちよつと出来かねる」

「な、なんですか？」

「こいつは俺の弟子だが、実力は俺をとうに上回ってるんだ。だから、君を保護した場合、俺がこいつにどうにかされる可能性がある」
「おおい、こいつには師匠を敬う気持ちはないのか！」

「師匠を師匠とも思っていないカイルに思わず千花が頭を抱える。

「でも、シモンさんから仕官できないなら弟子を取って言われたって」

「それは、第二王子のご命令だからだ。俺だけの命令ならば、こいつは聞かない」

「……」

命令を聞くのは、王族だけとかどんだ俺様なんだ。……けど、シモンさんもちよつと情けなくない？

「あ、じゃあ、その第二王子様とやらに、わたしを帰すように掛け合ってください」

「そ、それは、少々無理だと思うが……」

「ちえつ、やっぱり無理か。」

千花ががっかりしていると、カイルが更に言ってきた。

「俺の弟子になるならば、出来るだけ早く帰せるように尽力してやる。生活面も待遇を良くするぞ」

「……どんなにわたしが帰りたいって言っても、帰してくれないんだよね？」

「ああ、おまえがこれほどの魔力の持ち主でないならすぐに帰していたが、俺を上回るほどの魔力の持ち主だからな。これなら第二王子も文句は言うまい」

……その第二王子って人もまさか召喚してまで弟子を取ろうとするとは思わないと思うよ。

「うつゝ……」

千花は頭を抱えて唸る。

ああ、どうしよう。

ム力つくけど、ここはこいつの話に乗るしかないのか。乗らない

場合は、野垂れ死にコースっぱいしなあ……。こんな訳の分からないことで野垂れ死には嫌だ、うん。

千花は頷くと、カイルに聞く。

「……敬語は使わなくちゃ駄目？」

「まあ、なくてもかまわない。俺も師匠に使ってないしな。なんならカイルと呼び捨てにしてもいい」

「……ええ？」

俺様なのに、カイルと呼び捨てにするのはOKなのか？

千花がまじまじとカイルを見返すと、なぜか彼は頬を染めてそっぽを向いた。

「それでどうなんだ。俺の弟子になるのか、ならないのか？」

「うう、しょうがない、弟子になるよ。……本当にちゃんと帰る方法教えてくれるんでしょうね？」

「しかるべき時が来たらな。まあ、数年先のことだと思うが」

「数年先なんて困るよ！ それじゃ元の世界に戻った時にわたし死んだことになってるかもしれないじゃない」

あれ、行方不明者の死亡確定って何年だっけ。千花は叫びながらもそんな悠長なことを考えていた。

「それはおまえ次第だ。せいぜい頑張ることだな」

「言われなくても頑張るよ」

死亡確定だけは嫌だ。なんとしてもそれまでには家に帰らないと。千花は拳を握って決意を新たに頷くと、カイルに言った。

「じゃあ、嫌だけど、ここにお世話になることにする。すつごく嫌だけど」

しつかりと嫌だけどのところを千花が強調すると、カイルは顔をしかめた。

「おまえの部屋はここだ」

カイルに案内された二階にある部屋は、元の世界の千花の部屋よりも三倍は広かった。

「わあ、可愛い部屋ー」

その部屋の壁には爽やかなグリーン系の壁紙の上に同系色のボーダー壁紙、またその上に控えめに小花を散らした壁紙が貼られていた。

備え付けのアンティークな机と椅子。チェストにベッド。確かに待遇はいいようだ。

「なにか必要なものがあるなら女中のメリサに言うといい。すぐに揃えてやる」

「うん、そのメリサさんて人はどこにいるの？」

千花が聞くと、カイルは部屋にチェストの上に置いてあったベルを取った。

「用があるときはこのベルを鳴らせ。これはおまえの部屋専用のベルだからすぐにこの部屋に来る。試しに鳴らしてみろ」

「うん」

素直にベルを鳴らすと、程なくして四十代くらいの髪をひつつめた女性が部屋のドアをノックして現れた。

「お呼びでしょうか」

「ああメリサ、弟子を取ったから紹介する。ティカ・サトー、歳は……いくつだ」

「十六だよ」

「メリサでございます。以後、よろしくお願いいたします」

「あ、はい。よろしく願います」

メリサは千花に頭を下げると、千花も慌てて彼女に下げ返す。

「十六か、せいぜい十四、五歳だと思っていたが幼く見えるな」

カイルが千花の全身をまじまじと観察するが、千花にしてみれば、幼く見られがちな日本人の大体の年齢を当てる方が驚きだ。

「顔だけ見れば十二くらいだが、おまえ、体つきだけはいいいからないやに長々と見てると思ったら、セクハラかよ！

「……殴つてもいい？」

「殴つてから言うな。さっきの平手といい、凶暴だな、おまえ」
殴られた頭をさすりながらカイルが愚痴る。

「まあ、仲のよろしいことで。師弟と言うより、まるで恋人同士です
ね」

「……そう見えるか？」

「冗談でもやめてください」

まんざらでもなさそうなカイルがちょっと怖い。千花は慌ててメリサに認識を改めてもらった。

「まあ、残念です。カイル様はおもてになるのに恋人はいらっしゃらないので、私たち使用人はやきもきしているのですわ。ティカ様がその気になりましたら、いつでもこのメリサにお申しつけください。精一杯応援させていただきます」

カイル、もてるのか。確かに外見は超絶美形だけど、性格がアレすぎるだろう。

千花は世の中の不条理さを呪いながら、期待に満ちた目で見てくるメリサに全身全霊で否定した。

「……いや、そんな気はまったくありませんからっ！」

「……そうですか。本当に残念ですわ。……それはそうと、ティカ様お召し替えをなされませんか？ そのお洋服はこの気候には少し涼しすぎるかもしれないので」

「確かにちよつと寒いかも」

ぴつたりした半袖Tシャツにふくらはぎ上までのパンツにサンダルという格好なのが、先程まで汗をかいていたせいもあり、かなり肌寒い。

「それに肌や体の線を少々露出させすぎですわ。カイル様には目の毒です」

「いや、むしろ目の保養だが」

……おまえは黙ってる！ と千花は有無を言わせない笑顔でカイルを黙らせると、メリサに向き直った。

「はい、着替えます。あの、汗をかいてたので、出来ればお風呂に入りたんですけど、いいですか？」

「はい、すぐにご用意できます。こちらへどうぞ」

メリサに案内された浴室はゆったり出来る浴槽やシャワーもあり、使い方は日本にあるものとそう変わらなかった。

うつわー、高そうなお風呂ー。まるでホテルみたい。……さすがにライオンの口からお湯は出てはいないけれど。

千花がいかにも高級そうな金の蛇口やシャワーヘッドを眩しげに見ていると、メリサに着替え一式とタオルを渡された。

「それでは、ごゆっくり」

「はい、どうもありがとうございます」

千花がメリサを見送っていると、約一名、入浴に大変邪魔な者が残っていた。カイルだ。

「カイル、わたし今からお風呂に入るんだけど。とつと出ていくてくれない？」

なんとか笑顔で千花は言うが、その頬はひきつっていた。

「なんだ、せつかく背中を流してやろうかと思ってたのに」

カイルのその言葉に、千花はぞわつと鳥肌を立てる。

せつかく平和的に言っただけなのに、これは体に直接分かせないと駄目なようだ。

「出てけ——っ！」

千花はカイルをボコボコに殴ると、浴室のドアの鍵をしっかりと閉めてから、異世界での初お風呂を堪能した。

03 ガルディア王宮へ

少し冷えてきていた体もすっかりほかほかになって千花は上機嫌で風呂から上がった。

タオルで体を拭くと、たちまち水分が吸収されていていつて千花は驚いた。

試しに洗った髪の毛を拭いてみると、こちらもほとんど乾いてしまった。おまけに髪や肌に必要な水分までは吸収しないらしい。

「すごい、ドライヤーいらないや」

異世界の高性能なタオルにすっかり感心しながら千花はメリサから受け取った着替えを広げてみた。

下着は千花の世界とそう変わらないようだがブラはないらしい。その代わりにキャミが長くなったようなものがあつた。……つまりこれを着るということらしい。ちよつと心細い感じだが、仕方なく千花は下着を身につける。

その上に桃色のドレスのような長いワンピースを着る。太腿までの長さのストッキングを履いた後、ふくらはぎまでの編み上げブーツを履く。

「うわあ、馬子にも衣装かもー」

脱衣所の鏡に全身を映して、千花は前や後ろを確認する。この格好だけで何割り増しか自分が可愛くなったような気がするから不思議だ。

普段あまり女の子らしい装いはしない千花だったが、それでも今の自分の格好にはうきうきした。

「まあ、ティカ様よくお似合いですわ」

ティカが風呂から出るのを待っていたらしいメリサが、千花の姿を見て褒めた。

「あ、どうも。メリサさん、お風呂ありがとうございました」

「いいえ、お入りになりたい時はいつでもお申し付けください。そ

れはそうと、ティカ様がお出になつたら、カイル様が部屋まで来るようにとおっしゃってましたわ」

「分かりました」

メリサに案内されてカイルの部屋に入った千花は、シモンがいるのを見て、そういえばいたんだっけと彼に失礼なことを思った。

「ああ、とてもよく似合っている。これならこのまま王宮に向かつて問題ないか」

「お、王宮ですか？」

いきなり大仰な話題になったので、千花はびつくりした。

「第二王子に俺が弟子を取ったことを報告しなければならぬからな」

こともなげに言うカイルに千花は反論する。

「で、でも、わたし、王子様に会うのに必要な礼儀作法なんて全然知らないよ！？ そんなんで大丈夫なの？」

それどころか、敬語自体できるかどうかも怪しいくらいだ。

「その点は全く気にしない人物だから大丈夫だ」

「……そうなの？」

「ああ」

第二王子様とやらはその身分によらず、随分気さくな人物らしい。そう心配することでもない和理解した千花は思わずほっと息をついた。

しかし、王子様に会うなんて大事なのに、簡単に会うと言うなんて、この二人は結構な重要人物なのかもしれない。

「それでは行くか」

カイルはちよつとそこまで、のような感じで言うと、三人は簡単に城の前まで移動した。

目の前にそびえる白い美麗な城に、千花が思わず口をあぐり開けて見とれていると、カイルが彼女の額を指先で小突いた。痛みはなかったが、いきなりだったので思わず千花は仰け反ってしまう。「なにすんのよっ」

「馬鹿みたいに口を開けて上を見るな」

「！馬鹿みたいで悪かったわね！」

確かに間抜け面だったろうと想像できるだけに、千花は真っ赤になって怒鳴った。

シモンが城の衛兵に目をやると、彼らは頭を下げ、城の入り口から退いた。

——つわあ、顔パスかあ。

その様子を少々驚いて千花は見ていた。

シモンはカイルにはかなわなくて正直情けないと思っていたが、案外偉い人なのかもしれない。

「……あの、シモンさんでもしかして結構偉い人なんですか？」

恐る恐る千花が上目遣いで聞くと、とんでもない返答がことなげに返ってきた。

「……ああ。一応、この国の魔術師団師団長をしている」

「そ、それって結構な重要人物ってことですか？」

「まあ、一応な。しかし、俺より強大な魔術師が身近にいるから代替わりさせようとしたんだが……、失敗だったようだな」

シモンは深い溜息を付くと、カイルを見た。

「……誰がそんな面倒な役目に付くか。それに俺は一人で行動している方が性に合っている」

カイルがうんざりとした様子でばつさりと切り捨てる。

「しかしだな……、稀代の魔術師であるキース・ルグランの再来と言われるおまえを放置しておくのは国家の損失だぞ。これは殿下も同じご意見だ」

「……ふん、無駄なことを」

千花には理解できない言葉もあったが、シモンは弟子であるカイルを後継者としていようだ。

そうこうしているうちに一つの立派な部屋の前で二人が立ち止まったので、千花も慌てて止まった。ひょっとして、ここが第二王子の部屋だろうか。

「エドアルド殿下に目通りを」

第二王子の名はどうやらエドアルドというらしい。

シモンが近衛と思わしき人物に声をかけると、その彼は「少々お待ちください」と言つて中に伺いに行った。

「今の人つて、近衛の人？」

王族の人を守っているならきつとそうだろうと思つて、千花は口にする。

「ああ、近衛騎士だ。おまえは初めて見るか」

カイルと小声で話していると、その近衛騎士が戻ってきた。

「殿下がお会いになるそうです。どうぞ中へお入りください」

促されて中に入ると、華美すぎない上品な部屋の中央に、二十代前半と思われる一人の人物が立っていた。

その人物は印象的な藍色の瞳をしていて、長い見事な金髪を緩く三つ編みにして前に垂らしている。美麗で、かつその上品な所作はまさに王子様というしかなかった。

「……まさか、本当に弟子を見つけてくるとはね」

王子はカイルを見て呆れたように溜息を付いた。

「ティカ、殿下に挨拶を」

シモンがそう言ってくるが、千花にはどう言っているのか分からなかった。……ので、自然と無難そうな挨拶になる。

「ち、いえ、ティカ・サトー、十六歳です。よろしくお願いします」
ペコリと千花が頭を下げると、エドアルドが微笑んだ。

「十六歳か、若く見えるね。それに変わった顔立ちだ。どこの国の者だい？」

エドアルドは本当に気さくな性格らしく、得体の知れない千花にも簡単に声をかけてくる。

「え、えーと、日本です」

「ニッポン？」

エドアルドが聞きなれない言葉を聞いたというように、首を傾げる。

「ニッポン、もしくはニホン。またはジャパン」

「ニホン？ ジャパン？ 聞いたことないな」

「それはそうだろうな、この娘は異世界の者だからな」

カイルが王子に対して不遜な口を利くのを千花は他人事ながらも、ついハラハラしながら聞いてしまった。

「カイル、おまえ……。まさか異世界召喚をやったのか」

エドアルドが驚愕に瞳を見開いた。

「異世界探索をしていたら、たまたま俺より魔力の高い娘を見つけたからな。俺の弟子になることを了承させだし、これで文句はないだろう」

「いや、その娘にも家族がいるだろう。すぐ帰してやった方がいいんじゃないか。なんなら、あの話はなかったことにしてもいい」

エドアルドが士官の話を持ち消えにするとまで言ったことに、千花は感動した。

うわあ、なんていい方なんだろう。わたしを家に帰せって言うてくれたよ。鬼畜なカイルとは大違い。

「今更だな。俺はこいつに魔術を教えるつもりでいるし、帰す気は全くない。ティカが帰ることがあるすれば、自力で異世界へ戻る時だけだ」

カイルは感激しているティカの気分を地に墜とすようなことを言った。どこまでも勝手な男である。

「しかし、それでは帰るのに何年もかかるぞ」

「……それはティカの努力次第だな。魔力に関してだけは全く問題ないから、それほどかからないかもしれないが」

カイルが肩を竦めると、エドアルドは千花自身に興味が沸いてきたようだった。

「へえ、そんなに魔力があるのなら、ぜひ見てみたいな。確か魔力を計る魔道具があっただろう」

「ああ」

カイルは水晶を手元に召喚させると、それを千花の両手に乗せた。

「えっ？ えっ？」

訳が分からず千花が慌てていると、カイルが説明した。

「魔力を計る魔道具だ。それに念を集中させる」

「念を集中させるって言われても……」

そんなことをやったことのない千花はうろたえてただ周りを見渡す。三人の男達は千花の動向を見守ったままだ。

「やり方が分からないなら、その水晶をじっと見つめているだけでいい」

ああ、それなら大丈夫だ、と千花はほっと息をつく、水晶に意識を集中させた。

その途端、水晶が虹色に輝きだして千花は思わずそれを取り落としそうになって慌てる。

「えええ、なにこれっ!？」

そしてとうとう虹色の輝きがエドアルドの部屋全体を眩しく照らしたかと思うと、いきなり千花の手元の水晶が跡形もなく消えた。

04 異国の姫君

先程までエドアルドの部屋を眩しく照らしていた光は消え去り、元の静寂な室内に戻っていた。

「き、消えちゃった……」

手元の水晶がなぜか消滅してしまったことで、千花はうろたえる。

「……測定不能か」

カイルが少し考え込むように顎に手を当てる。

「いや、まさかそんな者がいるのか？ それにあんな光の色は初めて見た」

シモンが驚愕を露わにして千花を見る。それに倣うようにエドアルドも興味深そうに彼女を見た。

「これは、それだけ彼女の才能が桁違いだということでもいいのかい、カイル」

「……まあ、そうだな。俺もまさかここまでの魔力の持ち主だとは思わなかったが」

「ええ？ それ始めから分かってたんじゃないの？」

「大体の魔力は予測することは出来るが、正確な魔力の量が分かるわけではないからな」

「……なんかいい加減……」

ぼそつと千花が漏らした一言に、カイルが冷ややかな視線で「なにか言ったか」と返した。

「別にー。……それはそうと、魔術師としてはわたしの魔力は合格ってこと？」

「いや、合格どころか、今すぐにでも魔術師団に入団してもらいたいところだな」

なぜかカイルではなくシモンが目を輝かせて言う。

「はい？ でも、わたしカイルの弟子になるんじゃないんですか？」

「いや、これだけの才能を埋めておくのはもったいない。いずれは

史上初の女性魔術師師団長も夢ではないぞ」

「いや、あの……わたしは家に帰りたいんですけど。そんな役職に就いたら帰るに帰れないじゃないですか」

割と強引なシモンに千花は内心たじたじになる。

第一、そんな人の上につく役目なんて面倒だ。

「ここに永住したらいいじゃないか。そもそも何年も行方不明になっていた人間が元の世界でうまくやっていけるとはあまり思えないが」

「！ 酷いです！ 第一、シモンさんがカイルに弟子を取れって言ったから、こんな訳の分からない状況になったんじゃないですか——っ！」

先行き不安なのは理解していたが、さすがにこれはあんまりだ。

思っていたいなかったところでのシモンの暴言に憤り、千花は瞳に涙を溜めて怒鳴った。

握った両手の拳が怒りのあまりぶるぶると震える。

暴力はいけないと分かっているが、すごく殴りたい。

弟子が弟子なら師匠も師匠だ。

「ティカ、気持ちは分かるけれど落ち着いて」

エドアルドが千花を宥めるように言うが、あまり効果はなかったようだ。

「だって、だって、だって！ 異世界召喚なんてされたおかげでわたしの人生、滅茶苦茶じゃないですか——っ！ シモンさん、そんなこと言うならすぐに家に帰してくださいよ！」

言ってみれば、千花は被害者だ。

間接的ではあるがその加害者のシモンがよりによって、元の世界でうまくやっていけないとは、思っただけでも絶対に言っただけじゃない言葉だ。

「ティカ、うるさい黙れ」

カイルがかつたるそうに手を振ると、千花は途端にしゃべれなくなった。

「……………！」

千花がなにごとか叫ぼうとして口をパクパクさせる。
やがてなにを主張しようと無駄と悟った千花の瞳からぼろぼろと涙がこぼれ落ちた。

「ああ、ティカ泣かないで」

エドアルドがティカの頬に流れる涙を指で拭った。

「第二王子、ティカに勝手に触れるな」

カイルがエドアルドから無理矢理千花を抱き抱えるようにして奪う。

「……………へえ」

エドアルドは瞳を見開いた後、面白そうに笑った。カイルは一瞬それを鬱陶しそうにして見たが、すぐにシモンに向き合って言った。
「師匠、ティカは俺の弟子だ。それを魔術師団に勝手に入団させることは俺が許さない」

「しかし、飛び抜けた才能があるのに士官させないとは宝の持ち腐れだぞ」

「くどい」

カイルは有無を言わせない口調で、シモンを黙らせる。

「カイルは余程ティカが気に入っていると見えるな。君のそれは独占欲かい？ 確かに彼女は毛色が変わっているが」

エドアルドがそう言うて上から下まで値踏みするように見たので、ティカは落ち着かなかった。

「そうだ、今日の晚餐はこちらで取っていくといい。ティカには今からその支度をしてもらおうか」

「……………晚餐は口実で、ティカに装わせることが目的だろう。晚餐だけならこの格好で問題ないはずだ」

エドアルドの提案に、カイルが不機嫌そうに眉に皺を寄せる。

「まあ、そうだが。わたしもティカがどんな女性なのか興味があるんだよ。……………そうそう、ティカの沈黙魔法はもう解いてくれるかな」

エドアルドは笑って言うて、侍女を呼びだした。

魔法が解除されたことで、ようやく話せるようになった千花はほっと息をつく。

「ちよっと、無闇に人に魔法なんてかけないでよね」

千花がカイルに文句を付けたら、彼は肩を竦めた。

「激昂する人間にはあれくらいがちょうどいい。おまえ、王子に『だつて』と何度も言っていたぞ」

そう言われてみれば、言ったような気がする。

千花はうつつまると、不敬だったかとエドアルドをちらりと窺った。

「わたしなら、全く気にしてないよ、大丈夫」

「……すみません」

エドアルドには幸い笑顔で返されたが、怒りのあまり身分の高い王子にまで八つ当たりしてしまった千花は己の未熟さに身が竦む思いだった。

「お呼びでございますか？」

茶がかった金髪に緑の瞳の落ち着いた感じの侍女が扉を叩いて現れる。

「ああ、セルマ。彼女はティカと言って、今度カイルの弟子になった娘なんだが、彼女に晩餐会の支度をしてほしいんだ。それもとびきりのやつをね」

エドアルドがそう言うと、セルマと呼ばれた侍女は驚いたように瞳を見開いた。

「まあ、カイル様の」

カイルのエドアルドへの口調といい、割と身分の高そうな侍女が見せる敬うような態度といい、カイルはひよつとしたら結構身分が高い人物なのかもしれないな、と千花はぼんやり思った。

「それではティカ様、こちらへ」

「は、はい」

セルマに別室の客間へ案内されて、千花はまず湯殿に連れて行か

れた。

一応王宮に来る前に風呂には入っていたのだが、問答無用で数名の侍女達に服を剥かれた。

「あああああ」

羞恥も手伝って、千花が戸惑いの声を上げる。

「ご心配されなくても、最高のお支度をさせていただきますわ、テイカ様」

いや、そういうことじゃないんですけど……。

侍女達に髪や体を念入りに洗われ、千花は半ば諦めの境地にいた。「それにしても、滑らかできめの細かい肌ですわね。お体も細くていられるのに、出るところは出ておられて素晴らしいですわ」

「はあ……どうも」

侍女達の褒め言葉につい気の抜けたな返事をしてしまう千花だが、その間も侍女達は爪を磨いたりして忙しい。

全身をタオルで拭かれ、ようやく湯殿から出たと思ったら、今度は台に寝かされ、いい匂いのする香油を全身に擦り込まれた。

全身マッサージを受けて千花がウトウトしかけたところに、セルマが声をかけた。

「テイカ様、それではお支度をしますので、ご移動をお願いいたしますわ」

「は、はい」

いけない、いけない。

あまりの気持ちよさに危うく熟睡するところだったよ。

千花は慌てて台から起きあがると、湯上がり用の薄い衣装を着せられて、衣装部屋へと移動させられた。

衣装部屋では侍女の間で、千花には何色が似合うか少し議論になった後、結局爽やかな色合いの淡い緑のドレスが選ばれた。そのドレスは爽やかさとふんわりとした柔らかさが絶妙で、こういう物が全く分らない千花にもかなりの一品だと分かった。

下着や靴はすべて繊細なデザインのものに取り替えられ、侍女達

が千花にそれを着せていく。

あー……、お姫様ってこんな感じなのかな。支度のたびに毎回こんなことあるなんて大変そう。

自分はお姫様でなくてよかった、と安心しながら千花は目の前に置いてある全身を映す鏡をじっと見ていた。

背中の中程までの真っ直ぐな黒髪は丁寧に梳られ、艶やかだ。横の短めの髪を残して、サイドをドレスと同じ色の細いリボンで編み込んで飾り、髪型は完成のようだ。

仕上げに化粧を施された途端、幼い自分の顔が一変に大人っぽくなったので、千花は驚いた。

「まあ、なんてお化粧が映える方なんでしょう。とても美しいですわ」

「これなら、殿下もきつと満足されますわ」

侍女達が褒めるのも満更お世辞ではないようだ。千花は呆然としてその支度の出来映えを見ていた。

鏡の中の千花は、どこから見ても美しい異国の姫君だったのだ。

05 そんなに簡単に言うことなのか

……うわ、化けた……。

姫君そのものの自分に驚きながら、侍女達の技術に千花は素直に感心していた。

「綺麗にしてください、ありがとうございます」

ぺこりと侍女達に千花が頭を下げると、彼女達は驚いたようだ。

「ま、まあ、カイル様のお弟子のティカ様がたくし達に頭を下げられることなんてありませんわ。それに、エドアルド殿下のご命令です」

「それでも、ありがとうございます」

千花がもう一度頭を下げると、戸惑っていた侍女達がやがて破顔した。

「ティカ様、ご丁寧にありがとうございます。またぜひともあなた様のお支度を担当させて頂きたいですわ」

「あ、はい。もし次がありましたら、よろしく願います」

今回の支度はエドアルドの思いつきで、まあさすがに次はないだろうが。

侍女達に手を取られて、千花はドレスの裾を踏まないように慎重に歩き出す。

客間から出ると、いきなり知らない男性から声をかけられた。

「へえ、君がカイルの弟子か。どこの姫君かと思った」

歳は、千花よりも少し年上くらい。十七、八くらいだろうか。エドアルドと同じ色彩で顔も似通っている。

「まあ、レイナルド殿下。ティカ様をご覧になられにいらしたのですか？」

……殿下ということは、この人も王子様なんだろうか？ エドアルド殿下に似ているし。

熱心に見つめてくるレイナルドに戸惑いながら、千花は思う。

「まあね。あのカイルもさすがにとつとつ士官せざるを得ないと思つてたけど、これは予想外だったな。……とても綺麗だけど、君はひよつとして、カイルの恋人？」

「と、とんでもない！」

あんな鬼畜魔術師の恋人と誤解されるなんてショックだ。

千花が慌てて首を振って否定する。すると、レイナルドはなぜかほつとしたように息をついた。

「あ、違うんだ。よかった」

……なにがよかったんだろう？

千花が首を捻っていると、レイナルドが千花の傍に寄ってきた。侍女達は遠慮しているのか声をかけてこない。

「僕はレイナルド、この国の第三王子だ。君の名はなんて言つの？」

千花の予想通り、目の前の青年は王子だったようだ。千花は城に来る前に教えてもらった略式の礼を取るべく、ドレスを両手で摘んで答えた。

「ティカ・サトーです、殿下」

「ティカか、可愛い名前だね」

「あ、ありがとうございます」

身分の高い王子にかなり気さくに話しかけられて、若干千花は腰が引けた状態になる。……それにさっきからなにやら熱っぽい視線を受けているようで、落ち着かない。

「殿下、ティカ様はエドアルド殿下に晩餐のご招待を受けておられるのです」

「そうなんだ。じゃあ、僕も一緒に出ようかな。一人くらい増えても別に構わないだろう？」

「はい。エドアルド殿下にお伝えして、そのように手配させて頂きますわ」

セルマが微笑んで応対する。どうやらレイナルドが晩餐に参加するのは、決定事項のようだった。

「お邪魔するよ、アルド兄さん」

「なんだ、レイド。ティカと一緒に来たのか」

ティカ達を引き連れて、レイナルドが先にエドアルドの部屋に入ると、意外そうにエドアルドが眉を上げた。

「カイルが弟子を取ったっていうから興味があつてね。……そしたらとても綺麗な娘じゃないか」

レイナルドに促されてティカがエドアルドの部屋に入ると、彼は驚いたように瞠目した。

「これは……、見えたな。ティカ、とても綺麗だ」

「……驚いたな。どこの姫君かと思った」

シモンも千花の変わりように驚いたようで、まじまじと観察してくる。

二人に賞賛されたことで、千花はさっきシモンに憤っていたのも忘れ、少々舞い上がってしまう。

「そ、そんなこと……」

恥ずかしそうに千花は頬を両手で包むと、赤い顔を俯かせた。

「……童顔も化粧一つでこれだけ変わるのか」

カイルが舞い上がる千花の気分を一气につき落とすようなことを言った。

「童顔で悪かったわねっ」

思わず千花はカイルをキツと睨む。

二人のように褒めるとは言わないが、少し黙っていてほしかった。

「童顔？ ティカはとても美人だけど？」

不思議そうにレイナルドがカイルに目をやる。

「第三王子は化粧に誤魔化されているのかもしれないが、ティカの見目は十二歳くらいだぞ」

「……そうなんだ？」

いくぶんがっかりしたようにレイナルドがティカを見る。彼はこ

れがティカの普段の顔だと思いこんでいたらしい。仕方なく彼女は頷いた。

「わたしの本当の年齢は十六ですけど。わたしの国の人とは他の国の人から見て、総じて若く見られるみたいですね」

「それでも、ティカ様のお肌やお体は素晴らしかったですわ。十二歳ではこうは参りません。ティカ様のお顔も、いずれ今のように大人っぽく花開く時が参りますわ」

「へえ、そうなんだ」

セルマのセクハラまがいの言葉に、男達が大げさなくらい反応する。じろじろと皆に体を観察され、ティカは思わず羞恥から叫び出しそうになった。

「確かに体つきはいいね」

エドアルドが世の中の乙女王子様像を壊すようなことを言う。

「うん、これなら多少童顔でもいいか」

レイナルドが頷きながらなにごとか納得している。

「ああ、そういえば、手足は細いのには胸はあったな」

最初にあった時の千花の格好を思い出しているらしいシモンが言った。どこのセクハラ親父だと思いつながら、千花はシモンを睨みつける。

「……ティカの体をじろじろ見るな」

カイルがかなり不機嫌そうに言ったが、千花はここに来る前に、彼も千花の体をしっかり観察していたことをもちろん忘れてはいなかった。

「カイルだって、屋敷でじろじろ見てたじゃない」

「俺はいいんだ」

「よくないでしょ、そういうのってセクハラって言うんだからね」千花がむっとカイルを見上げながら言うと、彼は眉間に皺を寄せた。……どうやら不満らしい。

「カイル、いくらティカが魅力的でも、弟子に手を出さないでね」レイナルドが釘を差すと、エドアルドもなぜか楽しそうに言った。

「そう考えると、訓練の時とか危険だね。ティカには師団舎まで来てもらって訓練した方がよさそうだな」

「それはよいお考えですね、殿下」

未だ千花の入団を諦めていないらしいシモンが嬉しそうにそれを受けて言った。

「おい……」

話が妙な方向に向かって、カイルの機嫌もどんどん悪くなっている。

「じゃあ、ティカには訓練の際には城まで来てもらおうか。……それでいいね、カイル」

「……仕方ない。俺ももちろん同行する」

有無を言わず決定するエドアルドの言葉に、本当に嫌そうにカイルが頷いた。

「ついでに他の者にも指導してくれると嬉しいな。無理にとは言わないけれど」

「……無理もなにも、始めからそのつもりでいるんだろうが」

カイルが苦虫を噛みつぶしたような顔で呻くように言う。

俺様な彼がやりこめられるのは千花にはちよつと小気味よかった。

……エドアルドは人当たりが良さそうに見えるが、ひよつとしたら結構な狸なのかも知れない。

「皆様、お食事の準備が整いましたわ。レイナルド様もお越しくださいませ」

話が一端落ち着いたところで、セルマが別室の客間に皆を案内する。

「ティカ、座って」

レイナルドが率先して千花のために椅子を引いた。

「あ、はい。ありがとうございます」

王子に椅子を引いてもらって大丈夫なんだろうかと一瞬千花は不安になったが、彼に甘えて、結局早々に着席した。

「レイドは随分とティカがお気に入りだね」

エドアルドが千花の隣に着席したレイナルドに楽しそうに言う。

「うん、まあ。カイルが弟子を取ったっていうから興味本位で見に行っただけ、ティカ綺麗だし、仕草とか可愛いし」

そこまで褒められると、千花はさすがに真っ赤にならざるを得ない。

「そ、そんなこと……」

「あ、赤くなった。可愛いなあ」

にこにこ嬉しそうにレイナルドが笑う。少し離れた席にいるカイルはそれに反比例してものすごく不機嫌そうだ。

「ティカ、僕、君に一目惚れしたみたいなんだ。魔術師を目指すのもいいけど、もし君さえよかったら僕の妃にならない？」

レイナルドがもの凄く大事なことをちよつとそこまで買い物に行ってくるのに気軽に言ってくる。

「……はい？」

思わず千花の目が点になったが、それは誰にも責められないだろう。

06 稀少な存在

「第三王子、なにを言っている。ティカは俺の弟子だぞ。それを無視して勝手に話を進めるな」

カイルが不愉快そうに言ったことで、千花は一瞬真っ白になった意識を取り戻した。問題のレイナルドは、カイルに対して「ちょっと黙っててくれるかな」などと言っている。

「申し訳ありません。それは無理です」

千花は慌ててレイナルドに答えたが、予想しない返事が返ってきた。

「どうして？ 君は僕が嫌い？」

「どうしてって……、殿下とはほんの少し前にお会いしたばかりじゃないですか。好きも嫌いもありません。それにこんな得体の知れない女を妃になんておかしいです」

自分を卑下したくはないが、この馬の骨とも知れない女を妃にするなんてどう考えてもおかしい。

それをこうも簡単に言うのは、もしかしたらこの王子にはすでに何人か妃がいるのかもしれない。

「得体は知れなくはないだろう？ 当代一の魔術師のカイルの弟子だし」

千花がカイルの弟子になった経緯を知らないレイナルドは当然のように言ってくる。

「……わたしは異世界の日本という国の出身です。それに庶民ですし、殿下に釣りあうとは思えません」

「……異世界？」

レイナルドが千花の言葉に驚いたように聞き返す。

「はい、わたしは異世界の人間です。ただ、わたしには魔力が並外れてあつたらしくて、カイルにこの世界に召喚されたんです」

「ティカが異世界人……」

呆然としたようにレイナルドがつぶやく。

千花はこれで諦めてくれるかなと心の中でほっとする。

いきなり王子妃になってくれなんて、いくらなんでも身に余りすぎる。

「それはすごいね！　カイルよくやったよ！」

「ええっ？」

ほっとしたのも束の間、レイナルドが両手を握ってきたので千花はびっくりする。

すごいとはかく、よくやったとは何事！？

「見たことのない顔立ちだから、他の大陸出身かと思ったら、まさか異世界から来たなんて驚いた。異世界の人間なんて、初めて見たよ」

それはそうだろう。

そんな機会がやたらあつたら困る。

「……そんなパンダかなにかを見るような目で見ないでください」
「パンダ？」

レイナルドに問い返されて、ああ、この世界にはいないのかと千花は理解する。

「わたしの世界にいる珍獣です」

言いながら、わたしはあんなに可愛くはないけどね、と千花は内心で苦笑した。

「珍獣なんてとんでもない。確かに君の存在は稀少だけど、こんなに綺麗なのに」

「ですから、それは化粧のおかげです。素顔を見たらきつとがっかりなされますよ」

「ティカ、そう卑下することもないだろう。君の顔は歳の割に幼いけれど、とても可愛いよ」

「第二王子、せっかくティカが断っているのに余計なことを言うな」
フォローするように千花を褒めたエドアルドに対して不遜にカイルが言う。

「しかしね、ティカは自己評価が低すぎだよ。彼女はそのままでも充分可愛いし、庶民というが、それなりに教養もあるようだしね」

「あ、ありがとうございます」

エドアルドの褒め言葉に千花が赤くなるのをレイナルドが面白くなさそうに見た。

「アルド兄さん、まさかティカに気があるわけじゃないよね？ 随分彼女に好意的みたいだけど」

「さあ、どうだろうね。だけど、別に嫌いになる要素はないだろう？ 装ったティカはとても美しいし、そのままの彼女もとても興味深い女性だよ」

「……ふうん、否定はしないわけだ？」

レイナルドがエドアルドを挑戦的に睨む。

自分のせいでなんだか険悪な雰囲気になりそうだったので、千花は慌てて口を開いた。

「あ、あのっ、エドアルド殿下、冗談はおやめください。今すぐ否定して——」

「ティカ、わたしも君に興味がある。いろいろとね」

エドアルドはそう言ったが、千花は彼がそう言うのは恋愛感情以外の理由からとは思えなかった。

それなのに、レイナルドをわざと煽るようなことを言うなんて、なにを考えているんだろうか。身分上失礼だとは思いながらも、千花は少しむっとしてしまう。

「……それは、わたしが異世界から来たからですか？ ああ、並外れて魔力が大きいことも関係ありますか？もしかしたら、そのことでわたしに利用価値がありますか？」

「おいおい、ティカ。殿下に対して失礼だぞ」

それまで傍観していたシモンが慌てたように言ったが、千花は黙ってエドアルドをじっと見ていた。

「……これは手厳しいね」

エドアルドは驚いたように瞳を見開くと、次には苦笑した。

「本当に君は興味深い」

エドアルドが一瞬だけ熱い視線を送ってきて千花は少しうろたえる。それを見逃さなかったレイナルドがエドアルドに宣言した。

「いくらアルド兄さんでも、ティカは渡さないよ。兄さんに妃候補はいくらでもいるだろう？」

「あのっ、レイナルド殿下、誤解です。エドアルド殿下はわたしのことはなんとも思っておられませんから」

「ティカ、わたしは君のことを興味深いと言っているだろう？ それがなぜなんとも思っていないことになるんだい？」

慌てて取り繕うとする千花に、エドアルドは楽しげに言う。

「エ、エドアルド殿下、で、ですから、おふざけはやめてください」これはさっきの反抗的な態度への反撃だろうか。

もはや面白がっていると思えないエドアルドに、千花は狼狽えまくる。

「……王子達、いい加減に晚餐に入りたいんだが。食事を取りながらでも会話はできるだろう」

不機嫌そうにカイルが会話に割り込むと、エドアルドがくすりと笑った。

「ああ、そうだね。せっかくの食事が冷める」

とりあえず自分を取り巻く妙な雰囲気が少しだけ和らいだので、千花はほっとする。

直球なレイナルドはともかくとして、エドアルドの思わせぶりな態度は心臓に悪すぎる。

「ティカ、この食事は大丈夫そうかい？」

エドアルドにそう言われて、千花は大皿に盛られた料理を見る。どうやらここでの食事は大皿から自分の皿に取る形式のようだ。

「はい、大丈夫そうです」

料理もそんなに元の世界と変わりはないさそうだ。食事のマナーもよく分からない千花は少しだけほっとする。

「ティカ、取ってあげるよ」

レイナルドがかいがいしく千花の世話を焼く。

「あ、ありがとうございます」

レイナルドは気を利かせたのか全部の大皿から料理を取ってくれたので、千花は食べきれるか不安だったが、味も元の世界のものとそう変わりはなく、おいしく食べられた。異世界でも料理がそんなに変わらないなんて不思議なものだ。

「ティカ、もつと食べる？」

「もう充分です。というか、お腹いっぱいです。ごちそうさまでした」

「もう？ 小食だなあ」

そう言うレイナルドは見ていて気持ちよいくらい食べている。

他の男性陣も結構食べていて、確かにこの中では小食になるかも、と千花は食後のお茶を飲みながら苦笑した。

「それはそうと、ティカ。妃の件、考えとして。僕は君がその気になるまで待つから」

一応断ったはずだが、レイナルドには千花を諦める気は全くないようだ。

千花はレイナルドを見上げると、先程の自分の考えを彼にぶつけてみた。

「……殿下には、他にそういう方いらっしゃるんですか？」

「そういう方って、妃のこと？ いないよ。僕が妃にしたいと思っただのは君だけだ」

あまりにも簡単に言うから、てっきり他にも妃がいるのかと思ったら、レイナルドは結構身持ちが堅いらしい。

「そうなんですか？ わたしはてっきり何人も妃がいらっしゃるのかと思ってました」

「酷いな、僕はそんな無節操な男じゃないよ。妃は一人だけだと決めるし」

「す、すみません。軽率でした」

いかにも心外なことを言われたとばかりに憤慨するレイナルドに

対して千花が小さくなる。

けれど、その一人だけに選ばれてしまった千花は、事の大きさに気づいて慌てて言った。

「で、でも、わたしはいずれ家に帰るんです。ですから殿下のプロポーズはお受けできません。召喚魔法を覚えなければならぬので、何年もかかるかもしれませんけど――」

「駄目だよ。君は帰さない」

千花の言葉を遮ってレイナルドが真剣な顔で言うてくる。千花はその様子になんとなく不安を覚えて彼を呼んだ。

「……殿下？」

「帰るなんて駄目だ。カイル、ティカに召喚魔法を教えるな」

思いもかけず強権を振りかざすレイナルドに、千花は震えた。

もし、彼に本当にこのまま帰れないようにされてしまったらどうしよう――。

「レイド、気持ちは分かるけど、それはティカには酷だよ」

エドアルドが諭したことで、レイナルドがはつとしたように千花を見た。千花は瞳に涙を溜めながら小さく震えていた。

「……レイナルド殿下、わたしは帰りたいのに酷いです」

「ティカ、ごめん。君を傷つけるつもりはないんだ。僕は君が好きで、だから……っ」

レイナルドの腕が千花を抱きしめようと動くが、それはなぜか途中で止まった。

「第三王子、食事の席でティカになにをする気だ。俺の弟子を勝手にどうこうするのは、いくら王子でも許さない」

どうやらカイルがレイナルドの動きを止めたようだ。

「分かった。今はなにもしないから、カイル、拘束魔法を今すぐ解け」

レイナルドが顔をしかめて命ずると、カイルはすぐに魔法を解いた。

気さくだけれど、レイナルドのこういうところはいかにも王子然としていて千花は戸惑ってしまう。

そのレイナルドは物事を見極めるようにカイルをじっと見つめてから言った。

「……カイル、君も弟子を心配するにとしては態度がおかしいな。それは君もティカのことが好きだからなんじゃないか」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2177ba/>

魔法の国のティカ

2012年1月13日07時46分発行